

中国

海外の  
地方自治体

# 福建省福州市

北京事務所所長補佐 山崎 利幸 (鳥取県派遣)



福州市は古くから海外との貿易が盛んだった都市で、華僑の故郷としても知られています。対外開放後の福州市は、台湾企業や華僑からの積極的な投資を原動力として経済発展を続けていますが、一方で環境に配慮した住みよいまちづくりも進めており、昨年9月には国家環境保護模範都市に認定されました。

## 福州市の概要

福建省の省都である福州市は、面積が約一万二〇〇〇km<sup>2</sup>、人口が約五九〇万の都市です。地理的には福建省北東部の沿海地域に位置し、台湾海峡を挟んで台北と向き合っています。アクセス面では、福州長楽国際空港が国内四〇の主要都市とつながっているほか、シンガポールやクアラルンプールへの国際線も運行されています。気候は一年を通じて温暖で雨にも恵まれているため、市内には緑が多く見られ、野菜や果物などの農作物も豊富に生産されています。また、まちの通り沿いに古くからガジュマル(榕樹)の木が植樹され、特徴的な景観をつくっていることから、福州は「榕城」(ガジュマルのまち)とも呼ばれています。

福州市は古くから貿易が盛んだったことから海外へ渡る人が多くおり、海外に住む福州出身者は世界五〇以上の国と地域に二五〇万人以上いると言われています。一九八四年の対外開放後、福州市は外資導入



↑福州のシンボルともいえる千年の榕樹

を強力に進めました。このときに積極的に投資をしたのが海外に住む福州出身者であり、現在の経済発展に大きな役割を果たしています。福州市の二〇〇四年のGDPは一五四八億元で前年比一三%の伸びを記録し、中国のほかの沿海都市と同様に著しい経済成長を遂げています。

台湾には六〇万人の福州出身者が住んでいると言われ、彼らは今もなお福州と台湾の経済的なつながりを強めています。福州市では、毎年五月に大きな見本市を開催しています。その事業の名称は「海峡兩岸經貿交易会」。福州市を中心とする福建省の港湾都市と台湾を一つの大きな経済圏にしたいという主催者のねらいがよく表されています。実際、この見本市に出展した福建省以外の企業のうち一番多かったのは台湾企業で、今年も特別に「台湾館」が設けられたほどでした。この「台湾館」には、最新の家電製品や高度な測定器械のほか、お茶、果物といった農産



↑水に恵まれている福州市は緑が多く見られる

品や養殖魚も展示されていて、台湾にとつても中国は工場であり、大きな市場であるという感じが感じられました。



↑今年開催された海峡兩岸經貿交易会の会場周辺。この交易会は市民も楽しめるイベントになっている

## 福州市の歴史

中国の地方は昔の地名を用いて漢字一文字で表されることがよくありますが、福州にも「閩(ピン)」という呼び方があります。「閩」は紀元前からの福州を含む一帯の地名ですが、まち自体の形成は、紀元前二二一年に秦がこの地に閩中郡を設置した時期から始まります。福州と呼ばれるようになったのは、唐代の七二五年にこの地に福州都督府が設置されてからのことで、これ以降、福州はこの地方の中心の都市として、また、国の対外貿易拠点の一つとして成長を続けました。

明の時代になると、福州は琉球王国の指定入港地となり、対外貿易拠点としてますます発展します。明は外国との交易に朝貢貿易(朝貢を行う国とのみ貿易活動を行うもの)の形態をとり、朝貢国として認められ

ない国の船を中国に入港させなかつたため、東アジアの貿易の中継地となつていた琉球王国は重要な輸出入相手国だ



↑福州はお茶所でもあり、市内には茶館や茶葉市場がたくさんある

つたと言えます。琉球王国は、この交易によつて富を蓄えて全盛時代を築いたと言われ、福州市内には、当時琉球人が活動の拠点とした「琉球館」が今も残されています。

近代もアヘン戦争後の南京条約によつて対外開港されたことで、福州は特産品であるお茶を中心とした中国産品の貿易拠点となります。現在も福州市内には茶葉の交易市場が築かれており、福州産の茶葉だけでなく福建省の山間地域のものも販売されています。

## 福州市の友好都市

福州市は、現在六つの都市と友好都市提携を結んでいます。一九八〇年に初めて友好都市提携した長崎市と、その翌年に提携した那覇市です。いずれも歴史的なつながりが縁となつて提携に至り、新たな交流が生まれています。

長崎市の場合は、市内に居住するほとんどの華僑の出身地が福建省であり、長崎の中国文化がいれば福建省からもたらされたといえることから結ばれました。また、長崎の四福寺(崇福寺・興福寺・聖福寺・福濟寺)の本山(萬福寺)が福州市に現存していることも、両市をつなぐきっかけとなりました。両市では、水産業や水道事業の技術協力にかかる研修員受入れや専門家派遣が行われ、民間レベルでもアマチュア無線の交流が行われるなど、着実に相互の理解と信頼を深めています。

那覇市の場合は、前述のとおり、両市が一四世紀から中国と琉球王国を結ぶ交流の拠点としてつながっていたことから結ばれました。両市は友好都市提携して以来、学術・スポーツなどの分野で交流を活発に行い、今も両市の小中学生を相互に派遣する「児童生徒交流祭」が、毎年開催されています。また、那覇市内には友好都市提携一〇周年を記念して作られた「福州園」という中国庭園があり、「国家歴史文化名城」にも指定されている福州の名勝が再現されています。

## 住みよい歴史文化のまちづくり

近年の改革開放政策によつて外資による工場進出やビル建設が進む一方で、福州市は美しい景観を守り、住みよい環境をつく

る取組みも行ってきました。国家環境保護総局が一九九七年に創設した「国家環境保護模範都市」への認定に向けた生活環境改善活動もその一つです。



↑今年の8月には環境モニタリングセンターが設置され、GPS等の技術を用いた環境管理が始まった

国家環境保護模範都市となるためには、二八項目にわたる審査基準をクリアしなければなりません。この基準の中には、環境保護への投資指数や飲用水源の水質、騒音の平均値、生活污水处理率などのほか、小中学校における環境教育の普及率なども含まれており、単に環境を管理するだけでなく、積極的に環境を保護していこうとする行政の姿勢が求められています。ちなみに、これらのほかに一人あたりのGDPが一万元以上であること、経済成長率が全国平均以上であることといった基準もあることから、この模範都市制度の創設の背景に、環境を顧みず経済成長のみを優先しがちだった都市に対する中央からの注意喚起的な意図もあつたことが感じられます。

福州市はこうした基準をクリアすべく、二〇〇一年から環境保護に予算を投じ、環

境改善や施設整備を進め、そして昨年九月、念願の国家環境保護模範都市に認定されました。福州市環境保護局は、この称号の取得が公表されると同時に、引き続き水源保護区の拡大や大気環境の改善、污水处理、生活ゴミの無公害処理、都市緑化等を重点的に進める方針を示しましたが、こうした行政の積極的な姿勢を受けてか、昨年末に一人の市民を対象に実施された環境保護満足度調査では、有効回答数のうち八八%が市の環境保護政策に満足しているとし、また、九六%が環境保護には市民の参画が重要であると回答しています。福州市民の環境保護に対する意識がますます高まっていることが示されました。

さらに、福州市の環境へ配慮した取組みは、住みよい歴史文化のまちづくりの手段ともなっています。それが一番よく表れているのが、市内に点々とつくられている大



↑市内には大きな公園が点在し、市民に親しまれている

きな公園です。市内の多くの公園は市民の憩いの場として近年整備され、都市としての生活環境をより豊かにしています。同時に都市の緑化率も高めています。また、ガジュマルがところどころに植えられた公園は「榕城」と呼ばれる福州らしい景観をつくり出し、歴史の趣をそと伝えてくれています。

## おわりに

昨年くらいから、中国では「緑色GDP」という言葉が目立つようになりました。これは、経済活動が環境に及ぼす影響を加味したGDPのことで、中国では昨年からの一部の地域で試験的に導入されています。改革開放から二十数年、中国は世界で最も速いペースで経済成長を続けていますが、中国が継続的に発展していくためには環境や資源の問題に真正面から取り組む必要があります。中央政府がこの経済指標を積極的に進めているのにはこのような背景があり、その必要性もますます高まっています。

今回紹介した福州市は、まだこの対象地域になっていませんが、経済、資源、環境、歴史文化に対する取組みを考えると、よい結果が生まれるのではないかと思います。環境に配慮しながら地域の特色を生かしていくまちづくりは、中国の地方都市においても重要な政策課題となっています。